

2. 高校生が性関係を持つことに対する考え方(自分のこととして)(表 18)

全ての高校 2 年生に、「交際していると仮定して、高校 2 年生で自分が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但し I 群〔2004 年度〕には、自分のこととしての性意識の質問を行っていないためこの項目に限り比較群なしで介入の前後比較のみとした)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の 5 段階で高校生の性関係の容認の程度を調べた(表 18)

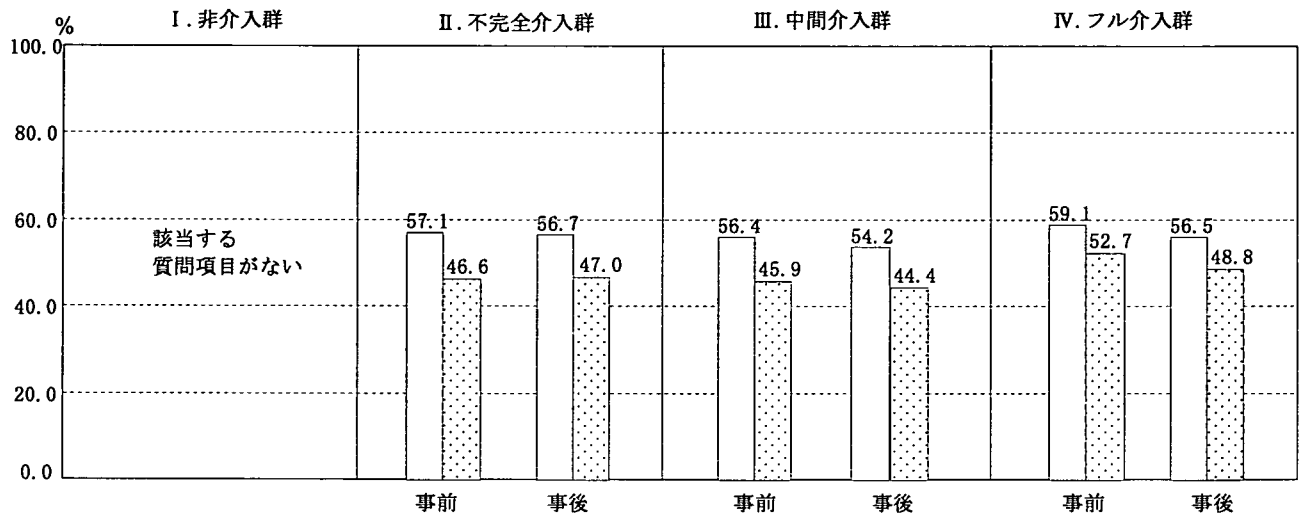
表 18 に、介入による生徒の意識(高校 2 年生で自分が性関係を持つことを容認する意識)の変化を示した。右端に容認者割合として「かまわない」と「どちらかと言えばかまわない」の合計として提示した。まず、不完全介入(Ⅱ)群では、容認者割合の変化は男女とも 1%以下で、ほとんど変化が見られなかったのに対し、中間介入(Ⅲ)群では、容認者割合は男女とも 2%減少と若干であるが減少し(ただし、否認者割合は男子 4%、女子 4%増加)し、やや性関係容認意識の抑制が観察された。それに対し、フル介入(Ⅳ)群では、容認者割合が男子で 3%、女子で 4%と、男女とも容認者割合が減少し、否認者割合も男子 3%、女子 5%と若干ではあるが増加が観察された。以上を、まとめると、本プロジェクトの WYSH 予防教育により高校生が自分自身が性関係を持つことに対する高校生の容認意識も抑制傾向が示された。高校生に対する教育効果の特徴としては、中学生ほど性関係容認に対する意識変容の教育効果は顕著ではないことが観察された。

表 18. 高校生の性関係容認意識：自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか

				かまわない	どちらかとい ばかまわない	どちらかとい えばいやだ	いやだ	わからない	容認者 割合	否認者 割合
I 非介入群： 該当する質問項目 がない	男子 6校	事前	391							
		事後	380							
	差									
	女子 6校	事前	623							
事後		604								
差										
Ⅱ 不完全介入群：	男子 17校	事前	1384	35.5	21.6	13.9	13.7	13.9	57.1	27.6
		事後	1267	37.3	19.4	15.5	13.8	11.8	56.7	29.3
		差		1.8	-2.2	1.6	0.1	-2.1	-0.4	1.7
	女子 18校	事前	1751	27.3	19.3	15.9	18.8	15.6	46.6	34.7
		事後	1656	29.5	17.5	16.6	21.6	12.3	47.0	38.2
		差		2.2	-1.8	0.7	2.8	-3.3	0.4	3.5
Ⅲ 中間介入群：	男子 14校	事前	1392	34.6	21.8	14.0	13.9	15.0	56.4	27.9
		事後	1332	34.6	19.6	16.7	14.7	13.4	54.2	31.4
		差		0.0	-2.2	2.7	0.8	-1.6	-2.2	3.5
	女子 14校	事前	1631	24.9	21.0	16.7	19.6	15.2	45.9	36.3
		事後	1615	25.4	19.0	18.9	21.8	12.0	44.4	40.7
		差		0.5	-2.0	2.2	2.2	-3.2	-1.5	4.4
Ⅳ フル介入群：	男子 10校	事前	783	35.2	23.9	13.8	12.5	12.8	59.1	26.3
		事後	763	37.4	19.1	14.3	14.5	12.6	56.5	28.8
		差		2.2	-4.8	0.5	2.0	-0.2	-2.6	2.5
	女子 11校	事前	1085	29.6	23.1	15.7	16.0	11.7	52.7	31.7
		事後	1066	28.0	20.8	16.5	19.7	11.3	48.8	36.2
		差		-1.6	-2.3	0.8	3.7	-0.4	-3.9	4.5

図 22. 性意識（自分が）

自分が高校2年生で性関係を持つことを「かまわないと思う」+「どちらかといえばかまわないと思う」高校生の意識



WYSH 教育の「高校生の性関係容認意識」に対する効果についての考察

本年度 WYSH 教育に参加した高校は全国で 43 校であった。

その中で性経験に対する容認度「一般に高校生が性関係を持つことをどう思うか」「自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか」について「かまわない」と「どちらかといえばかまわない」の値を足したものを WYSH 教育前と後で比較し、WYSH 教育の効果を検討した。その結果、全体では、「一般に高校生が性関係を持つことをどう思うか」「自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか」とともに、わずか数%の減少にとどまり、中学生のような顕著な性関係容認意識の抑制効果は観察されなかった。

その背景を調べるために、参加した 43 校を学校別に評価した。その結果、高校生の性関係の容認者割合が 10%以上減少し教育効果が示された学校は、「一般に高校生が性関係を持つことをどう思うか」では、男子 8 校 (19%)、女子 3 校 (7%)、「自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか」では男子 9 校 (21%)、女子 4 校 (9%) 存在し、同じ WYSH 教育を実施している、学校により効果が異なっており、教育効果が見られないわけではない可能性が示唆された。

上記の結果より、

■ **教育効果の男女差**：高校生の男子と女子を比較すると、高校生に対する WYSH 教育の性関係容認意識の影響は女子よりも男子の方に効果が大きいことが明らかとなった。

教育効果があった学校が多かったのは、「一般に高校生が性関係を持つことをどう思うか」よりも「自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか」であったため、「自分が高校 2 年生で性関係を持つことをどう思うか」について詳細な検討を行った。その結果に影響を与えている可能性のある要因を下記に記す。

■ **男子の効果**

①担任の関わり：男子で効果あり群の学校では、量的には、授業担当者に「学級担任」が 56%、関わっており、その他の効果なし群の 38%よりも担任が関わる割合が高かった。さらに、質的にも、「学年団が先生同士よりまとまった感じと、生徒を見つめる目が優しくしかもしっかりと生徒を観て話を聞く体制が出来てきたように思います。」「生徒の表情が明るかったこと。メッセージがしっかり伝わっていると感じたこと。生徒の純粋な部分を見ることができたこと」「生徒の反応が良い」「一緒に考えたり、話し合えてよかった」といった担任と生徒の関係性の向上が示唆される感想が共通して見られた。

②他の性教育の併用なし：男子で効果ありの学校群では、他の性教育実施群が 33%であるのに対し、効果なしの学校群では 48%であり、併用がない方が効果が見られた。

■ **女子の効果**：

③メッセージビデオの作成：女子で効果ありの学校群では、メッセージビデオを作成群が 80%であるのに対し、効果なしの学校群では 40%であった。メッセージビデオが特に女子に教育効果を及ぼしている可能性が示唆された。

④養護教諭による授業：女子で効果ありの学校群では、養護教諭による授業実施群が 78%であるのに対し、効果なしの学校群では 65%であった。女子には特に同性である養護教諭の教育の影響がある可能性が観察された。

⑤男女別授業：女子で効果ありの学校群では、男女別授業実施群が 40%であるのに対し、効果なしの学校群では 29%であった。上記と同じく、特に女子では同性同士の話し合いの重要性が示唆された。

⑥実施コマ数：女子で効果ありの学校群では、2 コマ以上の授業実施群が 100%であるのに対し、効果なしの学校群では 82%であった。

以上をまとめると、高校生への WYSH 教育が性関係容認意識への教育効果は男女で差があり、その理由も男女で違いがあることが明らかとなった。したがって、中学生とは異なり、高校生では、特に性差に配慮した性教育実施が重要であると考えられる。

(3)リスク認知の変化

◆中学3年生

1. 将来の性感染症感染リスク認知(表 19)

性経験の有無に関わらず全ての中学3年生に、「将来、交際中に自分が性感染症に感染する可能性があると思うか?」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来のSTI感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表19)。まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』の増加は男子2%、女子4%にとどまった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子23%、女子30%の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子20%、女子26%の増加、不完全介入群(II)でも、男子20%、女子22%で、男女ともに20%を越える大幅なリスク認知の増加が観察された。

以上を、まとめると、本プロジェクトの予防教育により、将来の自分自身のSTI感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

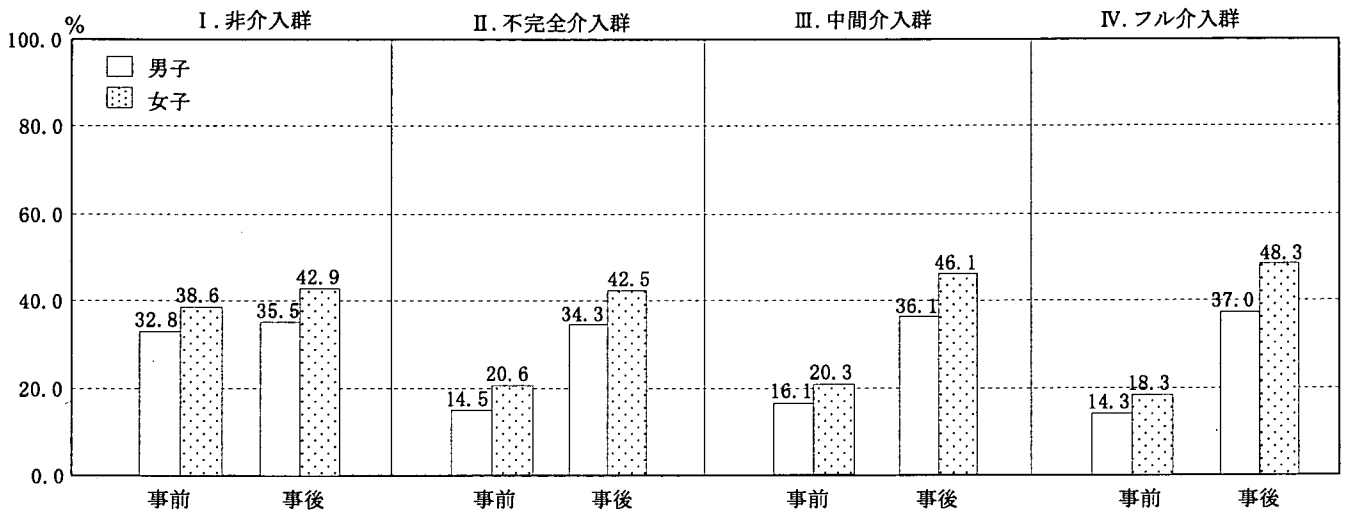
男女で、I群(非介入群:2004年度)の『リスク認知群』の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布とt検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも: $P<0.001$)。

表 19. STI リスク認知：将来、自分が STI に感染する可能性

				かなりある	ありそうだ	あまりない	全くない	わからない	リスク認知
I 非介入群 (2004年度)	男子 22校	事前	1182	2.9	29.9	24.0	11.7	29.4	32.8
		事後	1178	4.9	30.6	22.8	9.7	27.2	35.5
		差		2.0	0.7	-1.2	-2.0	-2.2	2.7
	女子 22校	事前	1095	2.9	35.7	21.8	4.7	33.2	38.6
		事後	1089	4.4	38.5	19.8	4.7	26.1	42.9
		差		1.5	2.8	-2.0	0.0	-7.1	4.3
II 不完全介入群	男子 40校	事前	2544	0.7	13.8	21.0	13.4	45.2	14.5
		事後	2383	3.7	30.6	22.0	10.0	28.9	34.3
		差		3.0	16.8	1.0	-3.4	-16.3	19.8
	女子 39校	事前	2402	0.9	19.7	22.7	8.4	42.2	20.6
		事後	2311	5.2	37.3	21.9	4.3	27.0	42.5
		差		4.3	17.6	-0.8	-4.1	-15.2	21.9
III 中間介入群	男子 12校	事前	847	1.2	14.9	23.0	14.3	41.3	16.1
		事後	818	4.9	31.2	24.3	8.1	25.4	36.1
		差		3.7	16.3	1.3	-6.2	-15.9	20.0
	女子 12校	事前	840	1.3	19.0	26.1	7.9	37.9	20.3
		事後	758	4.8	41.3	24.5	3.9	20.6	46.1
		差		3.5	22.3	-1.6	-4.0	-17.3	25.8
IV フル介入群	男子 19校	事前	1217	0.5	13.8	22.2	12.1	45.9	14.3
		事後	1147	3.8	33.2	24.1	8.9	26.2	37.0
		差		3.3	19.4	1.9	-3.2	-19.7	22.7
	女子 19校	事前	1162	0.8	17.5	24.7	10.3	40.2	18.3
		事後	1012	6.7	41.6	22.1	4.6	21.2	48.3
		差		5.9	24.1	-2.6	-5.7	-19.0	30.0

図 23. STI リスク認知

STI 感染の可能性が「かなりあると思う」+「ありそうだと思う」



2. 将来の HIV 感染リスク認知(表 20)

性経験の有無に関わらず全ての中学3年生に、「将来、交際中に自分が HIV に感染する可能性があると思うか？」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来の HIV 感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表 20)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』の増加は男子4%、女子5%にとどまった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子19%、女子26%の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子17%、女子21%の増加、不完全介入群(II)でも、男子16%、女子19%で、男女ともに20%前後の大幅なリスク認知の増加が観察された。

以上をまとめると、本プロジェクトの予防教育により、STI 感染のリスク認知の向上と同じく、将来の自分自身の HIV 感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

男女で、I群(非介入群：2004年度)の『リスク認知群』の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布とt検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも： $P < 0.001$)。

表 20. HIV リスク認知：将来、自分が HIV に感染する可能性

			かなりある	ありそうだ	あまりない	全くない	わからない	リスク認知	
I 非介入群 (2004年度)	男子 22校	事前	1182	1.4	22.8	26.7	15.5	32.1	24.2
		事後	1178	3.7	24.1	24.4	13.1	30.7	27.8
		差		2.3	1.3	-2.3	-2.4	-1.4	3.6
	女子 22校	事前	1095	2.1	27.3	25.7	7.0	36.8	29.4
		事後	1089	3.2	31.0	23.3	6.0	32.2	34.2
		差		1.1	3.7	-2.4	-1.0	-4.6	4.8
II 不完全介入群	男子 40校	事前	2544	0.5	11.9	19.4	15.3	47.0	12.4
		事後	2383	2.7	25.6	23.1	10.9	33.0	28.3
		差		2.2	13.7	3.7	-4.4	-14.0	15.9
	女子 39校	事前	2402	1.0	15.1	23.4	10.1	44.3	16.1
		事後	2311	3.4	31.8	24.1	5.1	31.5	35.2
		差		2.4	16.7	0.7	-5.0	-12.8	19.1
III 中間介入群	男子 12校	事前	847	1.7	11.7	21.7	14.8	44.9	13.4
		事後	818	3.4	26.7	28.1	9.0	26.7	30.1
		差		1.7	15.0	6.4	-5.8	-18.2	16.7
	女子 12校	事前	840	1.0	15.8	26.5	8.2	40.6	16.8
		事後	816	3.7	33.6	29.4	4.3	24.1	37.3
		差		2.7	17.8	2.9	-3.9	-16.5	20.5
IV フル介入群	男子 19校	事前	1217	0.5	11.1	22.7	14.2	45.9	11.6
		事後	1147	2.8	27.5	24.1	11.8	30.0	30.3
		差		2.3	16.4	1.4	-2.4	-15.9	18.7
	女子 19校	事前	1162	0.7	13.5	24.1	11.2	44.0	14.2
		事後	1119	5.3	35.2	25.4	5.6	24.8	40.5
		差		4.6	21.7	1.3	-5.6	-19.2	26.3

◆高校2年生

1. 将来の性感染症感染リスク認知(表 21)

高校2年生に、「将来、自分が性感染症に感染する可能性があると思うか?」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来のSTI感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表21)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』は男子1%未満の増加、女子4%減少であった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子11%、女子13%と男女とも10%以上の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子7%、女子13%の増加、不完全介入群(II)でも、男子9%、女子11%で、男女ともに10%前後の大幅なリスク認知の増加が観察された。

以上を、まとめると、本プロジェクトの予防教育により、中学生同様、将来の自分自身のSTI感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

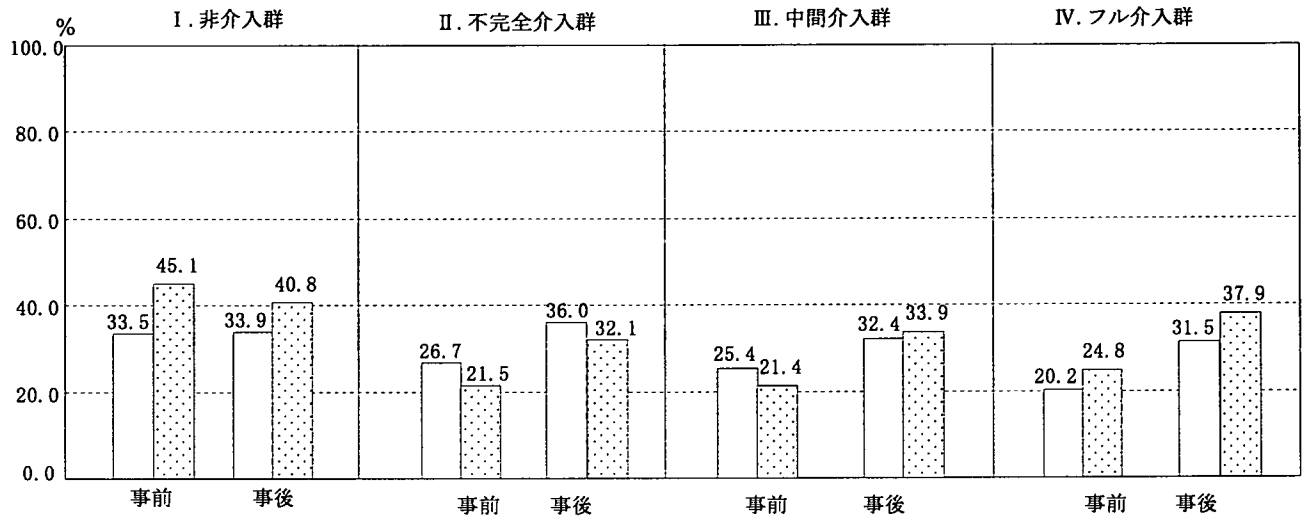
男女で、I群(非介入群:2004年度)の『リスク認知群』の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布とt検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも: $P<0.001$)。

表 21. 自分が STI にかかるとの可能性があると思うか?

			かなりある+ありそうだ		
			人数	(%)	
I 非介入群: (2004 年度)	男子 6 校	事前	391	131	33.5
		事後	380	129	33.9
		差		-2	0.4
	女子 6 校	事前	623	281	45.1
		事後	604	246	40.8
		差		-35	-4.3
II 不完全介入群:	男子 17 校	事前	1384	370	26.7
		事後	1267	456	36.0
		差			9.3
	女子 18 校	事前	1751	376	21.5
		事後	1656	531	32.1
		差			10.6
III 中間介入群:	男子 14 校	事前	1392	354	25.4
		事後	1332	432	32.4
		差			7.0
	女子 14 校	事前	1631	349	21.4
		事後	1615	548	33.9
		差			12.5
IV フル介入群:	男子 10 校	事前	783	204	20.2
		事後	763	240	31.5
		差			11.3
	女子 11 校	事前	1085	270	24.8
		事後	1066	404	37.9
		差			13.1

図 24. STI リスク認知

STI 感染の可能性が「かなりあると思う」+「ありそうだと思う」



2. 将来の HIV 感染リスク認知(表 22)

高校2年生に、「将来、交際中に自分が HIV に感染する可能性があると思うか？」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来の HIV 感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表 22)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』は男子で1%未満の上昇、女子で4%減少であった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子は4%上昇にとどまったが、女子では10%の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)では、男子5%、女子9%の増加、不完全介入群(II)でも、男子6%、女子8%で、男女ともに10%近くのリスク認知の顕著な増加が観察された。

以上をまとめると、本プロジェクトの予防教育により、STI 感染のリスク認知の向上と同じく、将来の自分自身の HIV 感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

男女で、I 群(非介入群：2004 年度)の『リスク認知群』の値を、II 群、III 群、IV 群(介入群)の値の分布と t 検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも： $P < 0.001$)。

表 22. 自分が HIV にかかる可能性があると思うか？

		かなりある+ありそうだ			
				人数	(%)
I 非介入群：	男子 6校	事前	391	104	26.6
		事後	380	102	26.8
		差			0.2
	女子 6校	事前	623	213	34.2
		事後	604	183	30.3
		差			-3.9
II 不完全介入群：	男子 17校	事前	1384	292	21.1
		事後	1267	347	27.4
		差			6.3
	女子 18校	事前	1751	261	14.9
		事後	1656	377	22.8
		差			7.9
III 中間介入群：	男子 14校	事前	1392	284	20.4
		事後	1332	338	25.4
		差			5.0
	女子 14校	事前	1631	242	14.8
		事後	1615	389	24.1
		差			9.3
IV フル介入群：	男子 10校	事前	783	158	20.2
		事後	763	183	24.0
		差			3.8
	女子 11校	事前	1085	183	16.9
		事後	1066	288	27.0
		差			10.1

(4) 性行動の変化－性経験率とコンドーム使用率

1. 性経験率

◆中学3年生(表 23)

本介入により中学生の性行動が活発化したかどうかを調べるために介入前後の性経験率を比較した。性経験率を介入前後で性別・介入群別に表 23 に示した。それによると、非介入群（I）では、男子 3%、女子 1%の性経験率の上昇が見られ、介入群では、IV群では男女とも 2%未満の増加、III群でも男子で 1%未満、女子 1%の増加で、II群でも、男子 2%未満、女子 1%の増加で、非介入群、介入群どちらも数%経験率が上昇したが、介入群と非介入群との差異は認められず、これまで同様、本プロジェクトの予防介入により中学生の性行動は活発化していないことが再確認された。

表 23. 中学生の性経験率

			総数	人数	(%)
I 非介入群 (2004 年度)	男子 22 校	事前	1358	83	6.1
		事後	1350	125	9.3
		差		42	3.2
	女子 22 校	事前	1211	59	4.9
		事後	1193	74	6.2
		差		15	1.3
II 不完全介入群	男子 40 校	事前	2544	79	3.1
		事後	2383	115	4.8
		差		36	1.7
	女子 39 校	事前	2402	87	3.6
		事後	2311	114	4.9
		差		27	1.3
III 中間介入群	男子 12 校	事前	847	31	3.7
		事後	818	35	4.3
		差		4	0.6
	女子 12 校	事前	840	48	5.7
		事後	816	56	6.9
		差		8	1.2
IV フル介入群	男子 19 校	事前	1217	33	2.7
		事後	1147	52	4.5
		差		19	1.8
	女子 19 校	事前	1162	51	4.4
		事後	1119	69	6.2
		差		18	1.8

◆高校2年生(表 24)

本介入により高校生の性行動が活発化したかどうかを調べるために介入前後の性経験率を比較した。性経験率を介入前後で性別・介入群別に表 24 に示した。それによると、非介入群 (I) では、男子 4%、女子 2% の性経験率の上昇が見られ、介入群では、IV 群では男子 3%、女子 5% の増加、III 群では男子で 1% 未満、女子 3% 未満の増加で、II 群では、男子 2% 未満、女子 3% 未満の増加で、非介入群、介入群どちらも数% 経験率が上昇したが、介入群と非介入群との差異は認められず、これまで同様、本プロジェクトの予防介入により高校生の性行動は活発化していないことが再確認された。

表 24. 高校 2 年生の性経験率

			総数	人数	(%)
I 非介入群 :	男子 6 校	事前	391	66	16.9
		事後	380	80	21.1
		差			4.2
	女子 6 校	事前	623	156	25.0
		事後	604	165	27.3
		差			2.3
II 不完全介入群 :	男子 17 校	事前	1384	179	12.9
		事後	1267	183	14.4
		差			1.5
	女子 18 校	事前	1751	415	23.7
		事後	1656	434	26.2
		差			2.5
III 中間介入群 :	男子 14 校	事前	1392	199	14.3
		事後	1332	196	14.7
		差			0.4
	女子 14 校	事前	1631	320	19.6
		事後	1615	362	22.4
		差			2.8
IV フル介入群 :	男子 10 校	事前	783	119	15.2
		事後	763	140	18.3
		差		21	3.1
	女子 11 校	事前	1085	262	24.1
		事後	1066	312	29.3
		差		50	5.2

2. コンドーム使用率

◆中学3年生(表 25)

介入により中学生の予防行動が促進されたかどうかを調べるために、介入前後のコンドーム使用率を比較した。一番最近のコンドーム使用率を介入前後で性別・介入群別に表 25 に示した。

(注：昨年度まではコンドーム使用状況に関しては「過去3ヶ月のコンドーム使用状況」を尋ねていたが、授業実施時期により、過去3ヶ月という期間では介入前も含まれてしまい、介入効果が適切に測定されていなかったため、今年度から一番最近のコンドームの使用率を尋ねる形式に変更した。)

上記の理由により、今年度は非介入群には過去3ヶ月の毎回使用者で代用した。非介入群（Ⅰ）では、介入の前後で、男子8%、女子10%と男女ともコンドーム使用率の大幅な低下が観察された。それに対し、介入群では、不完全介入群（Ⅱ）では、男子が1%未満の増加、女子が1%の減少で、顕著な変化は認められなかったが、非介入群のような使用率の大幅減少は抑えられた。さらに、中間介入群（Ⅲ）では、男子23%、女子5%の上昇が観察された。一方、フル介入群（Ⅳ）では、男子は14%も使用率の大幅上昇が認められたが、女子では19%の減少が観察された。(ただし、Ⅳ群女子では、教育前のコンドーム使用率が、70%弱と高く、シーリング効果の可能性もあるため、解釈には注意を要する)。以上をまとめると、教育前のコンドーム使用率が50%以下の比較的使用率の低い群では、今回のWYSH教育は予防行動（コンドーム使用促進）に大きな効果があることが示された。

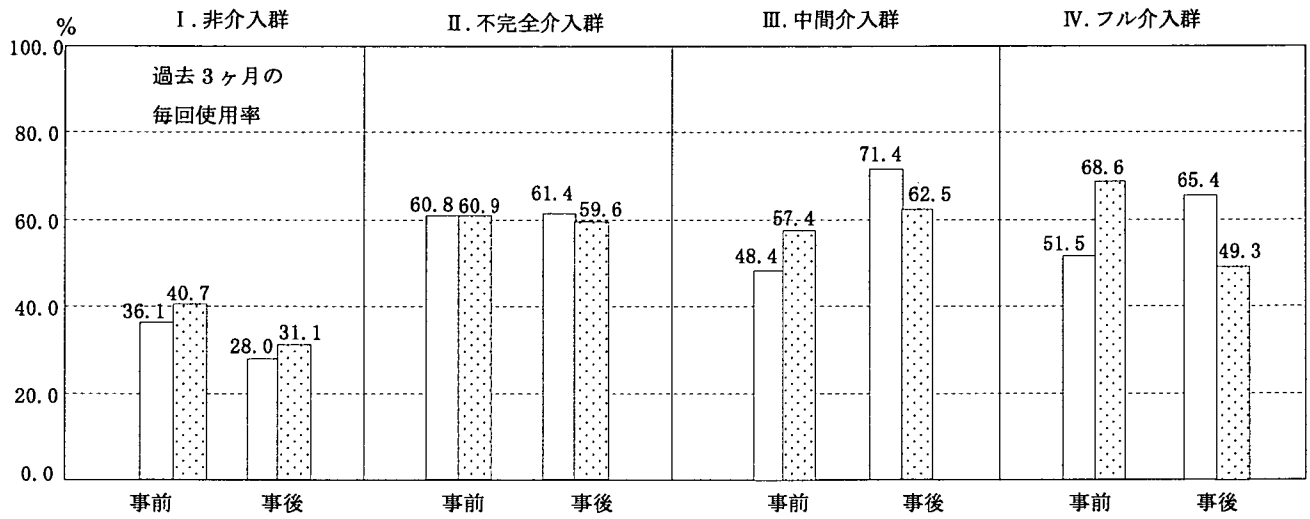
表 25. 中学生の一番最近の性関係でのコンドーム使用率*

			性経験者		
			人数	使った (%)	
Ⅰ 非介入群 (2004 年度)	男子 22 校	事前	83	30	36.1
		事後	125	35	28.0
		差			-8.1
	女子 22 校	事前	59	24	40.7
		事後	74	23	31.1
		差			-9.6
Ⅱ 不完全介入群	男子 40 校	事前	79	48	60.8
		事後	114	70	61.4
		差	35	22	0.6
	女子 39 校	事前	87	53	60.9
		事後	114	68	59.6
		差	27	15	-1.3
Ⅲ 中間介入群	男子 12 校	事前	31	15	48.4
		事後	35	25	71.4
		差	4	10	23.0
	女子 12 校	事前	47	27	57.4
		事後	56	35	62.5
		差	9	8	5.1
Ⅳ フル介入群	男子 19 校	事前	33	17	51.5
		事後	52	34	65.4
		差	19	17	13.9
	女子 19 校	事前	51	35	68.6
		事後	69	34	49.3
		差	18	-1	-19.4

*非介入群（2004 年度）は過去3ヶ月の毎回使用者の割合

図 25. コンドーム使用率

一番最近の性関係でのコンドーム使用率



◆高校2年生(表 26)

介入により高校生の予防行動が促進されたかどうかを調べるために、介入前後のコンドーム使用率を比較した。一番最近のコンドーム使用率を介入前後で性別・介入群別に表 26 に示した。

(注：昨年度まではコンドーム使用状況に関しては「過去3ヶ月のコンドーム使用状況」を尋ねていたが、授業実施時期により、過去3ヶ月という期間では介入前も含まれてしまい、介入効果が適切に測定されていなかったため、今年度から一番最近のコンドームの使用率を尋ねる形式に変更した。そのため、コンドーム使用率に関してだけはI群には従来の比較群を用いず、学校数は極めて少ないが2006年度の授業不備群を非介入群として代用した。)

その結果、コンドーム使用率は非介入群では男子で35%減少、女子で4%減少と程度の差はあれ、男女ともコンドーム使用率が減少していた。それに対し、介入群では、II群では、男子は変化なし、女子1%減少と男女ともほとんど変化がなかった。さらに、III群では、男子3%減少、女子1%上昇、IV群で、男子変化なし、女子4%減少と、高校生では中学生のような顕著な予防効果(コンドーム使用促進効果)は観察されなかった。但し、高校生では、教育前のコンドーム使用率がI群では、男子92%、女子81%、II群では男子78%、女子74%、III群でも、男子79%、女子76%、IV群でも、男子82%、女子76%と、中学生とは異なり、極めて高率であったため、シーリング効果の可能性もあると考えられる。本プロジェクトの介入は、教育前の使用率の低いリスク群には比較的効果がある可能性があるが、教育前使用率の高い集団には、教育前使用状況の維持にとどまり、未使用者には別のアプローチが必要であることが示唆された。

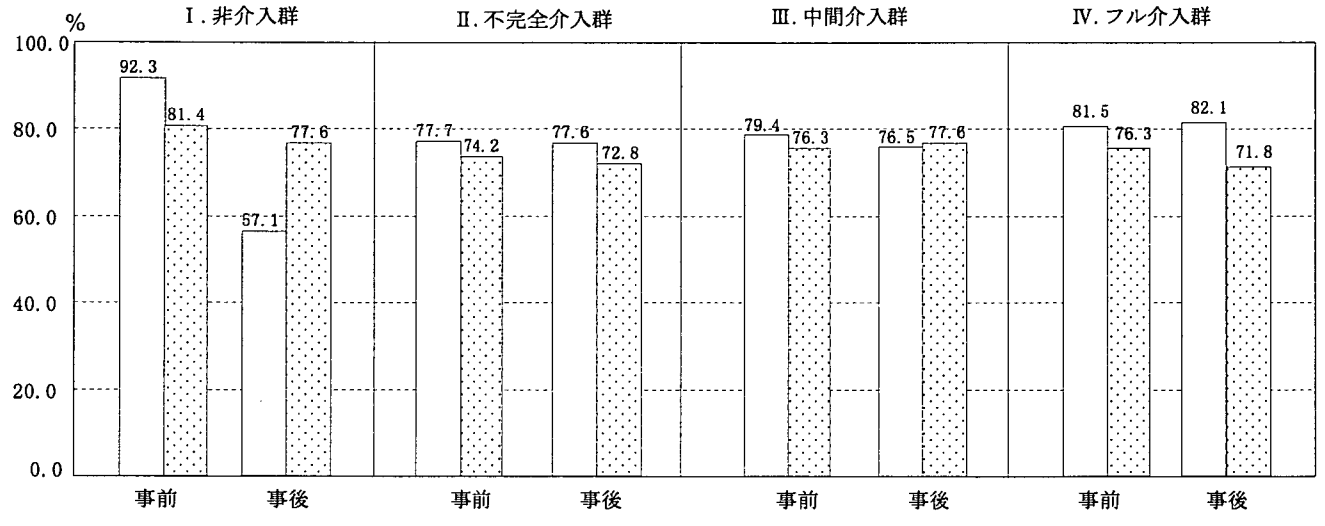
表 26. 高校生の一番最近の性関係でのコンドーム使用率*

			使った		
			性経験者	人数	(%)
I 非介入群： (2006年度) 授業不備校	男子	事前	13	12	92.3
		事後	14	8	57.1
		差			-35.2
	女子	事前	70	57	81.4
		事後	76	59	77.6
		差			-3.8
II 不完全介入群：	男子 17校	事前	179	139	77.7
		事後	183	142	77.6
		差			-0.1
	女子 18校	事前	415	308	74.2
		事後	434	316	72.8
		差			-1.4
III 中間介入群：	男子 14校	事前	199	158	79.4
		事後	196	150	76.5
		差			-2.9
	女子 14校	事前	320	244	76.3
		事後	362	281	77.6
		差			1.3
IV フル介入群：	男子 10校	事前	119	97	81.5
		事後	140	115	82.1
		差			0.6
	女子 11校	事前	262	200	76.3
		事後	312	224	71.8
		差			-4.5

*非介入群は過去3ヶ月の毎回使用率

図 26.コンドーム使用率

一番最近の性関係でのコンドーム使用率



(5) WYSH 教育を実施した教師の感想（自由記載）

WYSH プロジェクトに参加し WYSH 教育を実施した先生方に対し WYSH 教育を行って「良かった点」「困った点」を尋ねた（自由記載）。これらの自由記載の質的データの帰納的内容分析を行った。但し時間的な制約から、今回は初期段階の分析結果の概要のみを掲載するにとどめる。

◆中学 3 年生に対する WYSH 教育実施のコメント

2007 年度の WYSH プロジェクトへの参加中学校は 71 校で、授業実施状況に関するアンケートの回答率は 100%であった。

1. 良かった点

1-1 教師にとって良かった点

① 教材が使いやすい・授業がやりやすい（28 校）

代表例：パワーポイントがとても分かりやすく、生徒が真剣に話を聞いていた/パワーポイントやビデオを活用し、スムーズに行うことが出来た/パワーポイントによる科学的知識、グループワーク、心のつながりビデオと授業構成がなされており、授業がやりやすかった/パワーポイントがあるため、正しい知識、認識を教えるのに役立った。情報が世界→日本→愛知というように、地元ではどうなのかを考えることで、自分にも関係するという意識を持つことが出来た。小冊子やポスターの役割も大きいと思う。/今までの性教育のイメージは性の知識を教えることのみが多かったが、WYSH 教育では生徒に自分をそして周囲の人々を大切にするとする結びにつながっているの、指導する側がやりやすく、又、やり終えた後に、生徒が前向きになっている気がして気持ちが良い/資料がとても充実していて、使いやすい（パワーポイント、ビデオ、パンフレット、ポスターなど）/データが新しいので、最新情報を与えることが出来る/配布されたスライドやビデオが大変扱いやすく、予防教育としては十分短時間で目的にかなった授業が出来たと思う/性教育は苦手意識のあった教師から「大変実施しやすかった。性教育のイメージが変わった。授業の様子を保護者へぜひ報告したい」などの意見があった。

② 性教育にとどまらない効果（15 校）

代表例：予防教育と共に”生きる教育”についても考えさせることができた/感想など読んでいても自分ひとりで生きているのではない、仲間とともにがんばって生きているのだと言うことがよくわかるような感想などもたくさんありました/子供たちにも深く入ることが出来た/人間関係作りが難しい学年集団であったが、グループワークを通して自分の意見を伝えること、人の意見を聞くことの方法や楽しさ、難しさを少しずつ体験し自他尊重の気持ちが芽生えたような・・・/授業を通して、生徒との信頼関係がはぐくまれ、その後の性教育や保健指導・生徒指導などがとてもスムーズにいくようになった/生徒自身が明確なビジョンをもてたのか、学年全体の雰囲気明るくなった/グループワークを 2 時間実施し、どの子も生き生きと活動でき、和やか、笑いぬくもりのある授業となった/他の分野においても、WYSH 教育の手法を用いて、授業改革を図るきっかけとなった。

（教頭意見）/最後のいのちの学習では、自分自身のことを語ることができ、家庭的にしんどい子供たちが前向きにがんばってもらいたいというメッセージが伝えられた/たった 1 時間の授業でしたが、病気の予防にとどまらず、WYSH 教育のゴールである人間として夢と希望を持って生きようという意欲を持たせることが出来たと思います/望ましい人間関係を作ると言う点で、この授業をした後、からかいやひやかしがほとんどなくなった。生徒間でほっとしたような全体がほのぼのした雰囲気になっていった/生徒の感想で、優しい気分になったとかいっているものがあった

③ 協力体制が得られやすい (9校)

代表例：学年団で取り組めたことが良かった/学校全体の教育として全職員総力を出して指導にあたっていけるので、力強い/学校の教職員が協力してくれたこと。校長の理解があったので、比較的やりやすかった/保健体育担当・生徒指導・担任・養護教諭の4者で取り組むことができた/3年生担当の先生方にもたくさん協力してもらえ、授業の流れについてもいろいろアドバイスがあったのでとても勉強になった/3年職員に協力してもらい、授業を実践できたことは意義深い/今回の授業を校長、教頭も他の職員も見てくださり、感動と賛成の意見をいただいた。心強く思った/事前アンケートの項目、集計、分析が全国データとの比較という形で返していただけたので、それをもとに職員会や学年会で具体的に提案でき、協力を得やすかった

④ 学校/生徒の現状が把握できる (7校)

代表例：1回目アンケートにより生徒の実態が分かるので、その上での指導にはここぞと強調されるべき点が明確で指導に力が入る/学校の実情に合わせてできる/アンケート結果で本校生徒の実態がわかったこと。また、全国との比較ができたこと/生徒の現状を把握した上で実施できたので、内容が生徒たちの意識とあったものとなったと思う/アンケートをやって生徒の実態を把握できたので、自信を持って予防教育を実施できた/生徒の男女差が見えたり、個人差が見えたりして生徒理解に役立った

⑤ 教師の意識・知識向上 (6校)

代表例：教師自身も大変勉強になった/やってみての感想はやはり性教育は生身の教師が語らなければダメだと思いました/教師にとって間違いなく思い出に残る授業となった/来年も絶対指導をしたい。生徒の夢の実現を応援したいと思ったこと

⑥ 教師にとってとてもやりがいがあった(5校)

代表例：子どもたちが「良かった」「来年も3年生に実施したほうがよい」などの感想をもってくれたこと/性行為容認度を授業前と授業後にアンケートで調査したが、明らかに違いが出たことがうれしかった/今までに行ったどの性教育よりも、自分が感動できるものであった/このような授業をずっと続けてほしいと言ってもらえて苦労した分、喜びが大きかった/準備等大変な部分はあったがやりがいがあった

⑦ オリジナルの映像教材が効果的であった(4校)

代表例：メッセージ映像に対して、「感動した」「良かった」と反応が返ってきた/生徒に感動と心に残る授業を実施することができた。オリジナルDVDを生徒に見せたことで、授業内容(エイズ・性感染症の知識内容)が心に残るものとなった。今の子どもたちは文字で感動することが苦手なようである。その点から映像を効果的に活用する大切さを勉強させられた/ビデオを作り、生徒に見せたが、生徒はもちろん、参観した職員も感動していた。言葉よりも大きなメッセージになると改めて実感した。(職員からもそのような感想が数名からきかれました。)/クラミジアは怖いものだという話を聞いたただだと、マイナスのイメージだけで授業が終わるが、グループワークやメッセージビデオを見たことで、明るく授業を終えることが出来た/「つながり」のスライドでは3年間を振り返ることができ、「いい仲間だったなあ」と改めて感じられたようだ

⑧ その他分類外(2校)

代表例：3年間だと計画的に系統立てて行えるようになった/クラスごとで雰囲気の違いがあったが、どのクラスも比較的良い雰囲気に終わることが出来た。とても良かったと思う

1-2 生徒にとって良かった点

① 生徒の意識向上(18校)

代表例：性・人とのつながりを大切にしていきたいという気持ち、あせらずいきたいということが、感想や会話の中のでてきた/自分自身のことを振り返って生徒が考えることが出来た/しっかりと身近なこととしてとらえることができたのではないかと思います。改めて自分の将来について考える機会となってよかったと思います/「正しい知識が分かった」という感想が得られた/より具体的に自分の問題となったこの授業を受けたことによって、子どもたちは命の大切さやこれからどのようにして自分が生きていくかを感じたり、考えてくれたように思う。家庭に帰っても、自分がどのようにして生まれて育ってきたのかを母親に聞いたりもしたようで、女子は特に、「将来に妊娠したときは、良い母親になれるか」などを考え始めたようにも思う/生徒の感想にも「自分には関係ない」と思っていたが、「これから自分の身に起きる可能性は十分にあると知った。」「人ごとではないと思った」「10代の性感染症の増加は本当に深刻だと思った」「正しいことを知ることが大切」などがあった/生徒のエイズ性感染症に対する関心が高まった。早く性経験をしたいと思っていた女子生徒が「自分を大切にしたいので性経験はあせりたくない。今までの考えは間違っていたことに気がついた」との感想を書いてくれた/性感染症に関して、詳しく理解を深めることができた。特に誤った知識をもっている生徒には、考え方を改められたと思われる/生徒の先生方への思いや願いが伝わっていると感じた。生徒の先生方への固定観念が変化したのではないと思う/特に、身近なデータを知ること、性感染症は他人事ではないと感じた生徒が多く(感想文から)、目的に近づけた/生徒は自分たちはまだまだ知らないことを知った。自分の将来を想像し、夢や目標をさがす機会となったと思う。誠実な生き方を考え、実行するため手立てを探し始めたように感じられる/子供たちが生き方について考えてくれたこと。

② 積極的に参加できる(12校)

代表例：普段と違う雰囲気で生徒が意欲的に取り組めた/真剣に聞く態度がみられた/生徒たちは真剣に授業を受けることが出来た/特に生徒指導上、気になる生徒が1時間頭を下げることなく教師の話を聞いていたことが印象的であった/男女混合のグループでテーブルを囲んで席に着き、パワーポイントの説明は真剣に聞き、グループワークは仲良く話し合い、発表をすることができた/グループワークを取り入れたことで、教師主導の学習ではなく、子ども自らが考えよりよい答えを見つけ、今後、男女交際をどうしていきたいか考えられた/グループワークは生徒が主となって活動できる場面であり、また、他者の考え方を知る良い機会となった/グループワークがみんなさまざまな意見が出てよかった/「性関係に対する高校生の意識」をスライドで説明したとき、自然と「安易な肯定」に批判の声がでたり、「相手を大切にしたいから」などの思いや意見に「そうや」と賛同の声が出たりして、生徒の反応が非常に良かった/すべての生徒が沢山の感想を書いた/グループワークは、他の人の意見を聞いたことがとてもよかったと感想でありました。夢については楽しそうに活発に話し合うことができ、みんな生き生きしていました。

③ 生徒が受けいれやすい授業(12校)

代表例：後半のグループワークは昨年今年とも、生徒に大好評であった/生徒があまり恥ずかしがったり、拒否反応を示すことがほとんど見られない状況で授業ができた/恥ずかしかったり、しらけたりすることがあるのかなあと思っていたが、実際は真剣に楽しく取り組むことが出来たと思う/性の学習で行う、グループワークはこれまでその授業に関係のあるテーマ(避妊をすれば性交してよいのか?高校生になったら性交してもいいのか?など)が多かったのですが、今回”私の夢”という課題はこれまでと違った視点で子供たちが自分の未来を思い描けてよかったと思います/ゲームを実施したところ好評であった/グループワークでは自分たちのこととしてまじめに考えてくれた。人とのつながりで、マスメディアのことを問題にしたが、学校で起きている問題、子供の実態に合わせた課題をテーマにしたことが子供たちにはよく伝わった。ビデオは自分たちのあゆみをビデオにしたので、子供の心に残ったようだ/子供たちが身近に感じるものをグループワークのテーマにしている、子供たちも興味を持っていた/率直な意見交換により、「みんなの思っていることがわかってよかった」という生徒の感想が多かった。「楽しかった」という感想も多くあり、楽しい雰囲気です。「性」を学べてよかったと思います/プライベートな面に関するガードが固く、はじめは緊張気味の生徒でしたが、緊張を解く意味でも知識の定着をはかり、確認するためにもこの導入は効果的だったと思います/グループワークを取り入れたことは生徒の支持が高く良かった。(感想にも他人の意見が知れた良かった等、しっかり取り組めたことが現れていた
/正しい知識を生徒が自然に学べた(生徒の感想に今この時期に学べたことが良かったというものが多かった)

④ 身近で具体的なデータでわかりやすい(7校)

代表例：身近なデータを知ることで、性感染症は他人事ではないと感じた生徒が多く(感想文から)、目的に近づけた/クラミジアのビデオやパワーポイントのデータなど、身近に受け取ることが出来る内容になっていた/具体的データに基づいて、話の流れが作りやすく、生徒たちが飽きることなく授業に参加できた/身近なデータを提示できたので、自分たちの身の回りでも起こっていると生徒が実感できた/統計調査等のデータに基づいて作成されており、説得力があった。ビデオの中で「性感染症にかかった女子」の話があったが、実際の体験談を聞くことで、生徒の性感染症に対する意識が高まった/パワーポイントの活用やアンケートの結果等も利用しているので、生徒が身近なこととして捉えることができた

⑤ 他生徒の意見が聞けた(5校)

代表例：異性に関して周りの友達の言動に影響されやすい年齢の生徒たちが自分の考えや思いを深める機会が持てて他クラスの生徒の意見が聞けることにより、より安心して生活できる集団になってよかった/人の意見を聞けた/グループワークは、他の人の意見を聞けたことがとてもよかったと感想でありました/班で出た意見を発表させることで、他者の考えを聞くことができ、効果的であった/グループワークを通して友達の夢や考えを知ることにより、お互いを認めあうということができたようだ

⑥ 男女別授業の利点(1校)

代表例：同性同士なので、和やかな雰囲気です実施することができました

2. 困った点

① 学校の協力体制・教師の理解(22校)

代表例：大規模校における共通理解が難しい/授業者への協力や公開に向けての協力がなかなか得られず、準備が大変だった/学年によって養教から働きかけても実施してもらえないところがある。性教育に関しては養護教諭がやるものだという雰囲気がある/学校全体で取り組む、他の職員の協力など校内に広がっていかない/性教育に対する教師の抵抗感、「誰かがやるだろう」と思っていること/性教育に対するカリキュラムができておらず、単発で決まった人のみができるようになってきている。組織として動けていない

② 準備時間の確保(14校)

代表例：教師が予習する時間の確保が難しかった/WYSHの研修会后、それを3年の学年団に伝達講習をして意思統一をしなければいけないのですが、なかなか時間がとれず、9月末になり開始が遅くなった/先生方で事前の打ち合わせの時間が少なかったので、授業をするまで不安だった/教師間の共通理解ができていたので、やりやすいが、時間の確保が困難である(4月当初に確保するものの学校はやるべきことが多いので)/学年全体で実施するために、教職員の研修の場が必要でしたが、その時間的余裕がとれなかった

③ 教師の知識・経験不足(10校)

代表例：同一指導案を提示したが、教師側の指導力の差がある/教師間の知識、また性教育への意識等に差があり、この隙間を埋めるのは難しい/専門用語を説明するとき、なかなか難しかった(若い教師)/教師の経験不足により、教師に理解を得られなかったり抵抗感があったりする/授業者側の力量不足で、きちんと伝え切れなかったり、多少間違った捉え方をさせてしまったと反省する点があった/「性に関する授業」は抵抗があるのが本音であり、教師が研修を積んでもっと勉強しなければならぬと感じた

④ 教師間の意識のずれ(6校)

代表例：生徒も教師も、性に関する知識や考え方等に個人差が大きい/学年団の教師の温度差、意識の違い(必要感)/担任が苦手意識を持っていたり、同じ指導案でも担任によって内容が少しずつ変化してしまう(性教育に対する認識がそれぞれ異なった)/研修会へ来た2人は熱い思いがあるが担任との温度差はあったかもしれない

⑤ 授業の構成(10校)

代表例：性感染症の授業からグループワークの授業へのつながりが今ひとつ難しかったです/言葉が難しいものがあるので、生徒が十分に理解できたか不安である/女子生徒の中に配慮が必要な生徒がいたため、指導内容に工夫が必要であった/日時をあけて行うときは、違うテーマのグループワークのほうが新鮮でよかったと思った/雰囲気づくりがうまくいかず、生徒の感想も浅いものになってしまった/グループワークをもう少し、活発にやる方法を考えなければならぬと思った/グループワークが思った以上に盛り上がり、そのまま終了してしまいました。もっと人と人とのつながりの大切を振り返らせたらよかったです/男女合同で体育館において一斉授業の形態で授業を行ったために、グループワークを導入できなかった。深く掘り下げることは不十分だった可能性があると思われる